

審査の結果の要旨

論文提出者氏名 平野悠一郎

主題

本論文は、自然と人間、自然をめぐる人間関係の望ましいあり方という根源的な問題意識を根底に、現代中国（中華人民共和国期の中国）において人間と森林の関わりが認識面および社会変動の実態面でどう推移してきたのか、その森林政策に着目し多角的（政治的、経済的、社会的）な視点からの構造的解明を通じて明らかにしたものである。

構成と各章の内容

本論文は、序章に続き、第1部（第1～3章）、第2部（第4～7章）、第3部（第8～10章）、第4部（第11～13章）、第5部（第14～15章）、終章という構成である。分量はワープロ原稿で565ページという大著作である。

まず序章では、本論文の分析視角を提示しているが、森林の有する多面的な機能および価値・便益とそれらをめぐる人間関係の複合的性格を概念的に整理し、異なる主体による異なる価値認識間の政治・経済・社会的相互関係を多角的な視点から捉え分析を進める旨が述べられている。

第1部では、歴史的に現代中国が過少な森林状況から出発したこと、その公式統計データ等に依拠した確認と主たる原因の考察を行い、その後の森林政策を特徴付けることになった背景と政治・社会的変動の関係を整理している。

第2部では、過去50数年間にわたる森林政策の展開過程を丹念に検証している。現代中国における一つの政策的柱とされる地域住民を動員しての森林造成・保護政策の変遷をたどり、経済発展にともなう林産物需要増大への対応という経済的側面、治水や政府の威信維持を意図した共産党政権の国家的政策という政治的側面、森林の多様な機能・便益と住民生活の関係という社会的側面から重層的に動態構造の解明を行っている。

第3部では、第2部での分析を拡張し、権利関係・政策実施システム・法令という制度的な側面からの検討を加えている。そこでは、各時期の政治路線が森林政策の基本的動向を決定し、それに沿った林権確定政策は一般住民や企業間の権利関係ならびに経営形態を改変し、地域住民の長期的な経済的便益予測に依拠した健全な森林経営を阻害してきたと論じている。さらに、そうした共産党指導者層の意図は関連法規の整備により、地域社会における森林利用の規制や管理を徹底させるなど大きな影響をおよぼしたことを明らかにしている。

第4部では、森林に働きかけを行う各主体を指導者層、専門家層、基層社会（一般住民、企業など）というアクターに区分し、各主体による価値・便益の認識と行動を明らかにし、それらの相互関係の分析へと論を進めている。経済的便益と環境保全に加え国家威信の維持・高揚をも含む「美しい祖国」創造政策（指導者層）を背景に、森林官僚、知識人、技術者や篤志家などの専門家層が育成された。これらの専門家層は政策遂行の円滑化に貢献

するとともに、生態系の科学的理解を通じた知識や役割への誇りを抱き、また樹木への尊敬や愛着といった独自の森林価値を見出すようになった。こうした動向は、一方で基層社会における森林の価値・便益を部分的に保障するものではあったが、他方で土着の森林信仰に対する規制と管理強化につながり、日々の生活を木材に依存する地域住民の認識との乖離を際立たせることになった。著者は、こうした各アクター間の認識および行動における相互関係と変遷のダイナミズムを詳細に検証している。

第5部では、前部までの多角的な分析と考察を踏まえ、現代中国における森林政策の実施と社会的影響の変遷について構造的な側面から総括を行っている。その構造的骨格は、森林が有する諸機能および便益の維持と増大を指向する「第1の動力」と総合的な政治路線の方向性という「第2の動力」の間のせめぎ合いとして把握されることを説得的に論じている。これら2つの動力は「継続」と「断絶」という動力学的な現象形態として表出し、根底にある共産党政権の正当性維持や一元的な国家運営体制という根源的な動力に支えられてきた、というのが大まかな結論である。

終章では、本論文において得られた知見を簡単に整理するとともに、こうした地域研究の意義と限界、そして政策的インプリケーションの活用の仕方について考察を加え、さらに自然と人間の望ましい関係という根源的な問いに接近するべく今後の環境研究の進展への展望と自らの貢献的意欲を述べている。

評価

本論文の長所として、以下の諸点があげられる。まず第1に、冒頭に記したように大著作力であり、現代中国における森林政策の変遷に関してこれほど丹念に検証しまとめた研究は例がない。頻繁に現地を訪れ資料収集やインタビューなどの調査を行った成果は、随所に議論の深みと説得性の高さとなって表出している。第2に、複数の視点を交錯させた分析の方法論は独創的であり、立体的な構造理解を可能にしている。第3に、自然と人間の関係という根源的な問いかけが常に根底にあり、現代中国を対象とした事例研究ながら、より一般的な環境政策研究の進展と展望について示唆を与えている。加えてそれは、ともすれば特定事象の探求やその記述にのめり込みすぎるのを抑制し、分量の多さにもかかわらず論文に落ち着いた安定感を与えている。

無論、本論文に改善の余地が見当たらない訳ではない。以下の諸点があげられる。まず第1に、先行研究との関連付けにやや不足が見られ、それらを得られた知見と比較するなど課題も残されている。第2に、森林の便益や機能、第1・第2の動力など諸言説について概念的な理解が色濃く、それらの定量的評価や比較秤量などを含め、中国の事情に則した詳細な分析に踏み込んだ議論も検討の価値があろう。第3に、アクター分析という抽象化しての把握は一面では成功しているが、たとえば基層社会も利害が錯綜する多様なアクターから構成されており、アクター内での相互関係にまで考察を深めることも課題である。第4に、特に研究分野の近い審査員からは、著者が自ら遂行した膨大な現地調査の仕方や収集資料の利用法について、研究の進展に寄与するという意味で、参考になるような調査それ自体に関する経験的情報の提供も欲しかったとの希望が出された。

しかしながら、これらの課題は著者自身も十分に自覚するところであり、むしろ著者および本博士論文の有する高いポテンシャルから導き出される将来的検討課題とでもいうべ

きものであろう。ここで示された著者の力量をもってすれば、今後、本論文の分析枠組みの拡張と発展によって、これらの課題に取り組み、研究の新境地を切り開いてゆくことは十分に期待される場所である。

結論

したがって、本審査委員会は一致して、論文提出者に博士（学術）の学位を授与するのが適当である、との結論に達した。